

# 信時潔 年譜

## Biography of Kiyosmi Nobutoki



12月29日 大阪で生まれる。1887年 牧師だった父・吉岡弘毅に伴って高知、京都を経て、1897年、大阪に戻る。	
父の教会の長老・信時義政の養子となり、信時姓となる。	1898年
大阪府立市岡中学校に入学。第4学年終了後上京	1901年
東京音楽学校本科器楽部入学、のち研究科器楽部、および作曲部で、A.ユンケルに指揮法、H.ヴェルクマイスターにチェロと作曲、R.ロイテルに対位法、和声学を学ぶ。この頃、東京・田端に住む。	1906年
	ピアノ曲「きえゆく星影」
	1911年 「春の弥生」
東京音楽学校助教授となる。	1913年 ヴァイオリン独奏曲「あやつり人形」
	1915年
	1917年 「幻滅」「つなで」「おもひで」
	1919年 「渡り鳥」「旅の歌」
文部省在外研究員として、ベルリンに留学。ゲオルク・シューマンに学ぶ。	1920年 「あかがり」「深山には」「小倉百人一首より、弦楽四重奏曲「絃楽四部合奏」、ピアノ曲「譚詩曲 (Ballade)」
帰国。東京・巣鴨に住む。	1922年
東京音楽学校教授となる。1932年までの門下に、下総皖一、長谷川良夫	1923年
東京・国分寺に転居。	1924年 「短歌連曲」
	1926年 「小曲五章」「大島節」
	1927年 「白銀の目貫の太刀を」
東京音楽学校唱歌編纂掛編纂員となる。	1929年
東京音楽学校管絃楽部長となる。	1930年 「いろはうた」「不尽山を望みて」
東京音楽学校本科作曲部の創設に尽力。教授を辞し、講師となる。この後の門下に、高田三郎、大中恩らがいた。	1932年 「子等を思ふ歌」「桜花の歌」、ピアノ曲「六つの舞踊曲」、【新訂尋常小学唱歌】「遠足」「電車ごっこ」「動物園」など
	1933年 「『鶯の卵』より」「阿蘇」「瘦人を嗤ふ歌二首」
	1935年 【新訂高等小学唱歌】「太平洋」「羽衣」「春の曲」など
	1936年 「沙羅」、ピアノ曲「木の葉集」
	1937年 「海ゆかば」
	1938年 「國に誓ふ」
	1939年 「やまとには(国見の歌)」
	1940年 交声曲「海道東征」
芸術院会員となる。	1942年 「かどでの朝」
	1947年 「われらの日本」「古歌二十五首」
	1948年 「中国名詩五首」「帰去来」
『信時潔独唱曲集』『信時潔合唱曲集』(春秋社)刊行	1950年
東京藝術大学音楽学部講師退任	1954年
『信時潔ピアノ曲集』(春秋社)刊行	1958年
文化功労者として顕彰される。	1963年
叙勲、勲三等旭日中經章	1964年
8月1日 心筋硬塞のため死去	1965年 「女人和歌連曲」

# 生誕125年

# 信時潔とその系譜

第Ⅰ部 器楽の系譜	信時潔 —— 「きえゆく星影」 「木の葉集」 「かどでの朝 (弦楽編曲版)」
	下総皖一 —— 「ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロのための主題と変奏」
第Ⅱ部 声の系譜	信時潔 —— 「おもひで」「日本古謡より」 「子等を思ふ歌」「遠足」「春の曲」 「海ゆかば」「國に誓ふ」「かどでの朝」 「われらの日本」「帰去来」 「吹雪の道」ほか
	下総皖一 —— 「春の雪」「野菊」
	長谷川良夫 —— 「萬葉抄」より
	高田三郎 —— 「わたしの願い」より《雲雀にかわれ》
	大中恩 —— 「わたりどり」「海の若者」 ほか (曲目は変更される場合があります)

## 演奏会のねらい

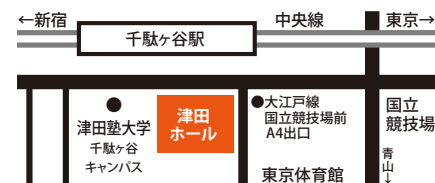
戸ノ下達也

信時潔(1887年～1965年)は、歌曲や合唱曲を中心とする創作活動、東京音楽学校本科作曲部創設への尽力や、戦前から戦後に至る後進育成に見られる教育活動のほか、音楽教科書編纂にも重要な役割を果たした音楽家だった。その特徴は、創作活動のほか、童謡運動やオペラ、管弦楽等々に華々しく活躍した山田耕筰のような派手なものではないにせよ、西洋音楽を日本や中国の古典文学に融合させるといふ、かたくななまでに自己の姿勢を貫いた作曲家としての実績と、現在に至る作曲家たちの育成、音楽教科書への関わりという教育者としての姿である。

今日、音楽は私たちの生活の中に日常化されているが、その背景には、信時潔の地道な音楽活動の系譜が脈々と息づいている。特に歌曲、校歌や団体歌、プロからアマチュアまで幅広い愛好者層を持つ合唱の領域での系譜は、音楽の裾野の拡大を考える上でも重要であろう。また、信時門下である細川碧、下総皖一、橋本國彦、長谷川良夫、益子九郎、柏木俊夫、高田三郎、大中恩、奥村一、齋藤高順、渡鏡子といった作曲家たちとその作品の現在に至る足跡も忘れてはならない。この演奏会では、信時潔を軸に、1900年代から1960年代に至る社会と音楽文化のいとなみを見通すことにより、今日私たちが親しんでいる音楽のあり様と変遷を、社会状況に即して再考してみたい。特に1920年代から30年代にかけて育まれた萌芽が、戦後になって開花した合唱のいとなみは、この系譜を辿る際に重要な鍵となると思われる。このような視点に立って、信時潔と、信時から連なる作曲家の系譜を照射し、信時のほか下総皖一、長谷川良夫、高田三郎、大中恩の作品を取り上げ、現在に続いていく音楽の系譜を辿ってみたい。

## 津田ホール | 交通アクセス |

〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷1-18-24  
TEL.03-3402-1851



- JR線 千駄ヶ谷駅下車  
千駄ヶ谷駅の改札口は1カ所です。改札を出て、正面の横断歩道を向かい側に渡った角が津田ホールです。入口は建物の右側へ回った階段をご利用ください。
- 地下鉄 都営大江戸線 国立競技場駅下車  
改札口を出たらA4出口へお向かい下さい。A4出口の正面の横断歩道を向かい側に渡った角が津田ホールです。入口は建物の右側へ回った階段をご利用ください。